博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　伊藤英人　伊藤

学位申請者　韓必南（ハン・ピルナム）

論　文　名　日本語と韓国語における所有表現の対照研究
—所有に見られる連続的様相と機能の棲み分け—

【審査結果】

提出された学位請求論文は，所有表現に関して日韓両言語の対照を試みた論考である。本論文は所有存在文のタイプと所有物の所有傾斜の観点から，日韓両言語の「ある/いる」と〈'issda〉，「もつ」と〈gajida〉，「する」と〈hada〉によって示される所有文および属格による所有表現の構造を，両言語の厖大な用例分析を通して対照言語学的に解明することに成功している。本論文は所有表現全般に関する日韓対照研究の嚆矢と称するに足り，また従来韓国語には存在しないとされてきた所有表現の存在が指摘されるなど，学術的価値が極めて高い論考であると評価された。審査委員からの質問に対する受け答えからも論文著者が当該の問題を広い視野から捉えており，今後の研究を発展させる識見を充分に備えていることが確認された。以上，論文審査と最終試験の結果に基き，審査委員会は全員一致で，韓必南氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると判断した。

伊藤を主査とし，本学の風間伸次郎教授，南潤珍准教授，　生越直樹・東京大学教授，井上優・麗澤大学教授の5名からなる審査委員会は，2014年4月26日に行われた公開審査（最終試験）の結果，韓必南氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると全員一致で判断した。

【論文の概要】

「ＡがＢをもつ」，「ＡにはＢがある」といった所有存在動詞による所有表現，「ＡのＢ」のような属格による所有表現は，言語によってさまざまに表され，「所有（存在）表現」として対照言語学的な関心をあつめているテーマである。提出論文は日本語と韓国語という類型論的に類似した言語における当該の問題を，両言語の実際の用例分析を通して考察した論文である。

提出された学位請求論文（本文247頁）は，序章，第1章に続き，第2章，第3章，第4章からなる第Ⅰ部，第5章および第6章からなる第Ⅱ部，第7章：結論の全7章から構成

されている。以下やや詳細に概観する。

第1章では本論文における分析の枠組みが示されている。所有存在表現一般に関する理論的研究および日本語の「ある/いる」構文，　韓国語の〈'issda(lit.ある,いる)〉構文に関する先行研究を渉猟，比較考察し，本論文が採る所有（存在）文の新たな類型と，所有者と所有物の意味関係として従来から提示されてきた「所有傾斜」による類別に新たなタイプを加えた枠組みを提示し，これによって日韓両言語の所有表現の比較を試みていくことが述べられている。

第Ⅰ部は日韓両言語の所有表現のうち，存在所有動詞によって表現されるものを扱っている。第2章では，日韓両言語の書き言葉コーパスの用例を詳細に検討し，存在動詞による所有文の違いとして以下の点を指摘している。韓国語の〈'issda(lit.ある,いる)〉には見られるが日本語の「ある/いる」には見られないタイプとして，①「時間経過存在文」du sigan jjym 'iss-daga dyre'on 'yesensayng(lit.2時間ほどあってから入ってきた→2時間ほど経ってから～)，②「<NP-主題格　NP-具格　存在動詞>型の措定存在文」'ajig conggag-yro 'issda(lit.まだ独身としている→まだ独身だ)のタイプがある。一方日本語の「ある/いる」には存在するが韓国語の〈'issda(lit.ある,いる)〉には存在しないタイプとして「属性数量詞存在文」例：百キロはある(韓国語ではdoida(lit.なる)を用いる)のタイプが存在することが指摘されている。また，存在動詞による所有文において，日本語に比べて韓国語は二重主格構文の出現頻度が際立って高いという事実も指摘されている。一方，所有傾斜による名詞分類において両言語は大きな違いを示さないとされる。

第3章は日本語「もつ」と韓国語<gajida lit.もつ>の用例を所有物名詞の分類と動詞の意味的・統辞的特徴から考察している。両言語において所有傾斜による名詞分類は大きく異ならないものの以下のような相違点が指摘される。所有物が〈身体〉の場合，日本語の「もつ」が「筋肉質の体」のように何らかの修飾成分を伴う点は韓国語〈gajida〉においても同様であるが，日本語では「もつ」が「筋肉質の体をもって」のような連用修飾節としてのテ形を取りにくいのに対して，韓国語では「身体名詞gajigo(lit.もって)」の形が頻出するという事実が新たに指摘されている。韓氏はこうした事実をgajidaの文法化と関連づけつつ説得的な論議を展開している。また，文の終止的述語となる場合，日本語は「もっている」のようなテイル形が選ばれるのに対し，韓国語ではgajiessda(lit.もった)のような過去形が，恒常的性質を表す場合にも多く見られるという，日韓両言語のパーフェクトの違いに起因する事実が指摘されている。また「親族」の所有では日韓両言語とも「目下」に限られる点も明らかにされている。

第4章では「青い目をしている（内在的・属性）」，「泣き腫らした赤い目をしていた(非内在的・状態)」に見られるような日本語の「する」と韓国語の hada(lit.

する)が論じられている。日本語の場合，文の終止的述語では「～をしている」が，連体修飾用法では「～をした～」の用例が最も多いが，連体修飾用法にも「～をしている～」が見られるのに対し，韓国語では連体修飾用法には～ryr han～（lit.～をした～）の例しか存在しない事実，また文の終止的述語において日本語では「～をした」は1例も出現しないのに対し，韓国語では～ryr haissda(lit.～をした)が過去時における状態叙述に使用され得るという事実が指摘された。

第Ⅱ部では連体修飾節，属格における所有表現が扱われている。

第5章では上で考察した所有存在動詞が連体形を取り，連体修飾節を構成する用例を全般的に考察している。「ある/いる」節についてはトコロ性による制限について言及しつつも，日韓両言語は構造的に類似していると看做している。一方「もつ」〈gajida〉に関して，日本語の「もつ/もった」においてはテンス的対立が連体修飾節では失われるのに対して，韓国語の〈gajida〉においては過去連体形のみが可能である点が大きく異なるとする。「する」と〈hada〉について，所有物は身体およびヒトやモノの外見に関る属性に限られ，日韓両言語とも過去連体形をとるのが一般的であるとしている。

第6章では日本語の「NP_1のNP_2」，韓国語の「NP_1 'yi NP_2」という属格助詞による所有構造が扱われている。両者を①所有（アパートの窓，姉の息子），②事象叙述内在型(警察の取調べ)，③属性叙述内在型（マリアの優しさ），④コピュラ関係(素人のぼく)，⑤その他語用論に基く関係（お話のお姉さん）に分類し，考察を行っている。韓国語では①所有の用例が多く，また④コピュラ関係は見られないのに対し，日本語は①から⑤までの多様な用例が見られることが明らかにされた。

第7章では，第6章までの考察を踏まえ，日韓両言語の所有表現の構造が俯瞰されている。最初に「ある/いる」「もつ」「する」と〈'issda〉，〈gaijida〉，〈hada〉構文における所有物の類別を所有傾斜の観点から分類した表が示されている。「ある」と〈'issda〉の所有物の分布は酷似するものの，日本語では「所持品」の所有が専ら「もつ」によるのに対して，韓国語では〈'issda〉の使用が多く見られること，「もつ」と〈gajida〉では両言語とも精神活動，財産，所持品に多く用いられ，身体と親族に関しては日韓両語間に相違が見られることが確認されている。「する」，〈hada〉は「ヒトの身体に関る事柄」，「事物の外見に関する事柄」の所有を表すのに用いられる。韓国語のこうした〈hada〉の用法は従来あまり注目されてこず，日本語と相違すると考えられてきたが，本論文は豊富な用例と共に韓国語におけるこうした表現の存在を明示している。続いて連体修飾による所有表現について，「所有者＋動詞＋所有物」，「所有物＋動詞＋所有者」の構造においてどのようなタイプの名詞が出現するかが所有傾斜による名詞分類と共に図によって明示的に示されている。さらに属格助詞〈'yi〉による所有表現では，所有者が普通所有物を限定する，連体修飾機能が主で

あり，所有動詞による所有表現とは大きく異なっていることが明らかにされている。

【公開審査（最終試験）の概要】

公開審査（最終試験）は2014年4月26日（土）16:00～18:00に東京外国語大学本部管理棟2階中会議室において行われた。始めに韓必南氏より，提出論文の内容が口頭で述べられ，その後各委員から評価と共に質問がなされ，韓氏よりそれらに対する答が述べられた。

【論文審査および最終試験の結果】

提出論文は所有表現という観点から日韓両言語のさまざまな現象を実際の用例分析を通して包括的に行った論考である。審査委員から高く評価されたのは以下の諸点である。

(1) 所有動詞述語文，所有動詞による連体修飾構造，属格構造について，角田太作氏によって提示された所有傾斜の観点および西山佑司氏による存在文の意味論的研究といった先行研究を踏まえ，実際の用例分析を通して日韓対照研究を行い，両言語の所有表現の類似点と相違を闡明するのに成功している。

(2)所有動詞のテンス，アスペクトといった形態論的文法範疇にも注意を払いつつ日韓両言語の所有表現を巨細に見渡している。

(3)第4章で韓国語において〈～han～（lit.～した～）〉という動詞〈hada〉の過去連体形が所有者の属性,状態を表すのに多用されることが豊富な用例と共に明示されている。

(4)結論部分において日韓両言語の所有構造が所有者と所有物，所有傾斜等の観点から図によって明示されており,日韓両言語の所有表現構造を一目の下に俯瞰することが出来，日韓対照言語学において貴重な新知見が加えられた。

以上の諸点が高く評価された一方で，審査委員からは以下のような再考・改善すべき点が指摘された。

(1)所有表現という観点から日韓両言語の所有動詞述語文，所有動詞による連体修飾構造，属格構造を対照としようとする壮途は高く評価し得るが，一方で個々の諸問題について更に深く解明すべき点が些か素通りされている観が否めない。

(2)「もつ」が所有・所持であるのに対し，〈gajida〉は所有権の移譲というモメントを含む。そうした両言語の個々の動詞のtelicityの差を考慮すべきである。また，随所で言及されるアスペクト形式の選択の問題も，日韓両言語のテンス・アスペクト体系の全体的な違いと結びつけて，もう少しつっこんだ分析があってもよかったのではないか。

(3)韓国語の名詞句における所有表現には〈'yi〉の他に中世韓国語の属格標識〈-s〉による後続名詞頭子音の濃音（喉頭化音）化，処格＋〈-s〉に起源する形式，〈∅〉

があるが本論文はそれらに言及していない。

しかしながら,最終試験における遣り取りから韓氏がこれらの問題点を充分に認識していることが確認され,また審査委員も上述の瑕瑾が本論文の学術的価値を損なうものでは全くないという点で意見の一致を見た。以上,提出論文と最終試験の結果から審査委員会は全員一致で韓必南氏に博士(学術)の学位を授与するのが適切であると判断した。